

Microsoft Word で文献管理 — 多言語化ソフトウェアを再地域化する徒労 —

多賀 吉隆

1. はじめに

この文章は、多言語文書作成ツールとしての Microsoft Word (以下 MS Word) の文献管理機能のスタイルに小規模な改造をすることを断念して、ゼロから書き直すことを選んだ理由を説明している。

1.1 文献管理ソフトウェア

MS Word の2007 以降のバージョンには文献管理機能が組み込まれている。通常、文献管理ソフトウェア、もしくは引用管理ソフトウェアと呼ばれるものには、次のような機能がある。

- (1) a. 論文提出先のスタイルに合わせた出典注を作る
- b. 論文提出先のスタイルに合わせた参考文献表を作る
- c. 書き直しに応じて、それらに対応させつつ更新する

何度も書き直しをする文書では、つけなければならない出典注が変わっていく。それに対応して参考文献表の項目も変わっていく。しかも論文を提出する先ごとに出版注と参考文献表の書き方を変えなければならない。とても面倒である。しかし、面倒であっても規則通りであれば、かなり自動化できる。そこで、文献管理ソフトウェアの出番である¹⁾。このようなソフトウェアの代表的なものとして、プロプライエタリなものでは Thomson Reuter 社の EndNote[1]、Elsevier 社の Mendeley [2]、フリー/オープンなものでは BibTEX[3]、Zotero [4] があげられる。LaTEX 向けの BibTEX を除くと、これらのソフトウェアの多くは、ワードプロセッサ・アプリケーションと組合せて使うことになる。実際、上にあげた EndNote、Mendeley、Zotero には MS Word 向けの拡張機能

(アドイン、アドオン、プラグイン) がある。ただし、これらの拡張機能はだいたい、MS Word の文献管理機能と協調していない。

それぞれの文献管理ソフトウェアには、多くの文献スタイル向けの設定が用意されている。また、文献スタイルをカスタマイズするツールも用意されていることも多い。例えば、Mendeley や Zotero は、出力をカスタマイズするために CSL (Citation Style Language) を使っているが、文献スタイルのレポジトリがソフトウェア開発用のウェブサービス GitHub 上にある [5]。

MS Word に組み込まれた文献管理機能には、付属のスタイルは少ないが、サードパーティのものがいろいろある。例えば、BibWord プロジェクトは多くの設定を提供し、カスタマイズするツールも用意している [6]。ところが、BibWord による設定は英語向けになっていて、多言語化を考慮していない。

1.2 国際化と多言語化されたソフトウェアなのに

Microsoft Office 2007以降では、国際化 (internationalization, i18n) され、その中で地域化 (localization, L10n) されている。つまり、ソフトウェアの基本部分は同じであり、それに設定を追加することで、それぞれの地域・言語に対応させている。さらに、多言語化 (multilingualization, m17n) がされている。つまり、複数の言語を同時に使うことができる。そのため、使用する言語の言語オプション (language pack) を追加していけば、多言語文書でも困らないはずである

実際、MS Word の文献管理機能も多言語化されている。しかし、基本的な方針がそうになっていることと、仕様や実装がそうなってい

ることは、別のことである。

私が確認した範囲では、アメリカ英語で使う場合を除くと、文献管理機能にはいろいろな表現の問題がある。それは日本語で使用すると、かなりひどい。その理由は、言語表現と書記変種の伝統にどのような多様性があるかを十分に考慮に入れていないことによると考えざるをえない。そのことについて実装と仕様の両面で主に日本語について説明していく。

なお、この文書は、Windows 7上の MS Word 2007、Windows 8.1上の MS Word 2013にもとづいて書かれている²⁾。

2 文献管理機能の概要

2.1 界面

MS Word 2007 以降の日本語版であれば、「参考資料」のタブの中に「引用文献と文献目録」グループがある。使用する文献は「資料文献の管理」から登録することができる。登録された文献については「引用文献の挿入」から選択することで出典注を文書の中に加えることができる。また、参考文献表は「文献目録」から挿入することができる。

出典注と参考文献表のスタイルは選択ができる。心理学の APA、文学の MLA、歴史学などの Chicago、計算機科学の IEEE などが事前に準備されている³⁾。付属するスタイルは、MS Word のバージョンにより異なる。また、同名のスタイルであっても、修正が加えられているので、異なるふるまいをすることもある。

資料文献の作成、編集では言語の選択ができる。実際には、言語と国・地域の対の選択になっている。私たちが最低限必要とする「日本語(日本)」「英語(アメリカ)」以外にも、追加することができる。「校閲」タブの「言語校正」グループ内の「言語の選択」で選んだものが追加される。挿入された出典注を選択して、さらにメニューを表示すると、「引用文献の表示」がある。これを選択すると、出典注に「ページ」を追加したり、「著者」「年」「タイトル」を表示しないことにしたりすること

ができる。ただし、このときのふるまいは、それぞれのスタイルの実装による。

2.2 実装と仕様

スタイルごとの設定の本体は、関数型言語で書かれたプログラムが書かれたテキストファイルである。それを出典注や参考文献表を出力するとき MS Word が逐次解釈して実行していく。そのため適切にプログラムを書けば、お望みの文献スタイルを作ることができる。

Microsoft Office 2007 以降、つまりバージョン 12 以降では、Office Open XML File Formats という規格によっている[7]。これは XML (Extended Markup Language) で書かれた複数のファイルを ZIP でアーカイブしているものである。文献管理のフォーマットについては、Part I の 2.6 Bibliography に書かれている。なお、XML は、情報を枝分れした木構造をテキストファイルで表現するためのマークアップの規格である。

XML の形になっている書誌情報は、MS Word に組み込まれた XSL 変換が文献スタイルごとの XSL ファイルを解釈・実行することで、HTML (HyperText Markup Language) に書換えられ、文書の中に出典注もしくは参考文献表として挿入される。

文献スタイルごとに XSL 変換のスクリプトは、Windows では WINWORD.EXE があるフォルダーの下にある Bibliography\Style フォルダーに、Macintosh であれば MS Word のパッケージコンテンツの下位の Contents/Resources/Sytle/ にある。そのためスタイルを追加・修正するには、管理者権限が必要であった。なお、Office 2013 以降では、ユーザーデータの下位のフォルダーに置けるようになっている。

出典注を XSL 変換するばあい、書誌情報は /b:Citation/b:Source の下にある。取得できるのは処理している単独の文献に関するものだけである。このとき地域化についての情報は /b:Citation/b:Locals/b:Local[@LCID]

表1 書誌情報の種類について日本語の例

SourceType	使用された日本語	期待される日本語の例
JournalArticle	雑誌/定期刊行物の記事	学術雑誌論文
ArticleInAPeriodical	新聞記事	定期刊行物記事
ConferenceProceedings	会議議事録	予稿集論文、大会発表論文

にある。LCID 属性には、マイクロソフト社で地域化情報を示す番号であるロケール ID を指定する。それは、アメリカ英語であれば1033、日本語であれば1041である。一方、参考文献表を XSL 変換するばあい、書誌情報は `/b:Bibliography/b:Source` の下にある。取得できるのは、処理する文献すべてについての情報である。地域化についての情報はやはり `/b:Bibliography/b:Locals/b:Local[@LCID]` にある。この下に、言語ごとの表現の訳、プログラムのふるまいを変えるスイッチの値などが置かれている。XSL 変換は、ヴァージョン1.0 にもとづき、Microsoft 社独自の拡張もある。ただし、VBA や Javascript、C#などのスクリプト言語をもちいて XSL の関数を拡張する機能は無効にされている⁴⁾。文書に挿入するときの HTML では CSS (Cascading Style Sheets) も使える。例えば、ある部分をイタリック体にすることは、i 要素をもちいることでも、なんらかの要素の style 属性で font-style に italic を指定することでもできる。ただし、CSS の実装は不十分である。style 属性の text-transform で、uppercase を指定した場合に大文字になるが、lowercase を指定しても小文字にならず、capitalize を指定しても最初が大文字にならない⁵⁾。

3 変な地域化

ここでは、ロケール ID が1033、つまり日本語のばあいの地域化情報がどのように変かを説明する。

3.1 訳語の選択

書誌情報を入力する「資料文献の管理」のウィンドウで使われる日本語が特に変である。具体的には書誌情報の種類がそうである。主なものを表1にあげる。

その他の書誌情報フィールドで大きな問題になりそうなのは、Case「訴訟情報」の中の Reporter である。これが「記者」と訳されているが、「判例集」としなければ誤解されるであろう。

`/*b:Locals/b:Local[@LCID]` の下にある地域化情報の訳語は、誤解を招くものはあまりないが、慣行と異なるものはやはり多い。例えば、`b:Strings/b:WriterCap` とその複数形用である `b:Strings/b:WritersCap` はそれぞれ〈著者〉〈共同著者〉、になっている。しかし、これは映画やテレビ番組の脚本家を意味するので、ともに〈脚本〉であることが期待される。

3.2 引用符の選択

スタイルに固有でない約物やプログラムのふるまいを変えるスイッチの値は `/*b:Locals/b:Local[@LCID]/b:General` の下に置かれている。記事や論文を囲むために、`b:OpenQuote` と `b:CloseQuote` がある。アメリカ英語1033では両者とも (")U+0022 (QUOTATION MARK) が指定されているが、日本語ではそれぞれ (")U+201C (LEFT DOUBLE QUOTATION MARK)、(")U+201D (RIGHT DOUBLE QUOTATION MARK) が指定されている。しかし、日本語で期待されるのは、(「)U+300C (LEFT CORNER BRACKET)、(」)U+300D (RIGHT CORNER BRACKET) である⁶⁾。

書籍のタイトルについては、英語ではイタリック体にするので、`b:NoItalics` に no が置かれている。日本語ではこれに yes が置かれ、イタリック体にはしない。書籍のタイトルのために `b>TitleOpen` と `b>TitleClose` があるが、これは英語でも日本語でも指定されていない。日本語では、それぞれ (『) U+300E (LEFT WHITE CORNER BRACKET)、(』)U+300F (RIGHT

WHITE CORNER BRACKET) が期待される。

3.3 人名の列挙に使われる属性

出典注や参考文献表で著者を区切るための `b:AuthorsSeparator` がある。これには、`(,)` (コンマと空白) が入っている。しかし、APA と組み合わせることが想定される日本心理学会の『執筆の手びき』でも、Chicago (Turabian) スタイルと組み合わせることが想定される『学術論文の技法』でも `(・)U+30FB(KATAKANA MIDDLE DOT)` が使われている [8, 9]。

人名を列挙するばあい、言語とスタイルの組合せがいろいろある。英語のばあいだけでも次のように分かれる [10]。ただし、必ずしも MS Word がそう出力してくれるわけではない。

- (2) a. Smithy, Alan, and Beth Smithy. (MLA)
 b. Smithy, Alan, and Smithy, Beth. (Chicago)
 c. Smithy, A., & Smithy, B. (APA)
 d. Smithy A, Smithy B. (Vancouver)

MS Word では地域化情報の中でアメリカ英語では、`b:General/b:NoAndBeforeLastAuthor` が `no` に `b:Strings/b:AndUnCap` が `<and>` に、`b:APA/b:BeforeLastAtuhor` が `<&>` に設定されている。

日本語のばあい接続詞を使わないので、`b:General/b:NoAndBeforeLastAuthor` が `yes` に設定されればいいはずである。ところが、これは `no` に設定されている。それをごまかすために `b:Strings/b:AndUnCap` と `b:APA/b:BeforeLastAtuhor` の設定が変なものになっている。

3.4 変な語順と訳語

地域化情報で語順が変わる可能性があるものは、言語表現自体が設定されているのではなく、文字列を組立てるためのフォーマットが用意されているものがある。フォーマットの中では %1 など別の文字列を挿入する位置を示している。このようなものに変なものが多い。編者と号数を例にあげる。論文集のば

あい、論文の著者が一次的な責任者で文献項目の最初に置かれる。多くのスタイルでは、編者は二次的な責任者としてタイトルの後に置かれる。英語などでは受身的に `<Edited by>` を編者に先行させる。これに対応する地域化情報は `b:Strings/b:EditedByCap` であり、英語では `<Edited by %1>` に設定されている。%1 のところに編者の名前を入れる。そのため日本語では `<%1編>` と設定されることが期待されるが、実際には `<編集: %1>` と設定されている。

号数は、`b:Strings/b:NumberShortCap` に英語であれば `<No. %1>` と設定されている。日本語で期待されるのは `<%1号>` であるが、実際には `<第 %1>` と設定されている。

3.5 フォーマットの中の空白

上の号数でも実は問題になるのが、整形のためのフォーマットの中に不要な半角の空白 (U+0020, SPACE) が含まれることである。例えば、版数を示すためのフォーマット

`b:Strings/b:EditionShortUnCap` には、`<第 %1 版>` が入れられている。この中の %1 には、いわゆる半角数字が1つ以上入れられるはずである。和文と欧文、算用数字の間に、日本語の組版の慣行としては、四分アキが置かれる [11, p. 65]。しかし、この四分アキは組版/レンダリングによるものであり、空白を表す文字がないことが期待される。実際、空白を除いた方が望ましいアキでレンダリングされる。

4 多様性を無視した仕様と実装

ここでは個別の地域化の設定ではなく、仕様と XSL の実装で地域化に問題が起こるものを扱う。

4.1 整列できない

文献管理ソフトウェアを使い、日本語で参考文献表を使うときに一番問題になるのは、望ましい順番、つまりアイウエオ順やアルファベット順で整列できないことである。これは文字列だけから読み方が確定できない日本語表記の特徴による。Zotero や Mendeley で使われている文献管理ソフトウェアをカスタマ

イズするための CSL (Citation Style Language) も今のところ日本語での整列に対応していない [12]。MS Word の組み込み機能を使うばあいでも、文献管理ソフトウェアの拡張機能を使うばあいでも、とりあえずの解決法は「文献目録を固定テキストに変換」を用いて、通常のテキストにして、カット・アンド・ペーストで整列することである。

なお、日本語化された BIBTEX では yomi フィールドを追加することで、整列できるようにしている。

4.2 引用符と句読点の関係

参考文献表の中や脚注・尾注内の出典注では、引用符がつくものに意味の区分のために句読点が付けたいばあいがある。このばあい、下のように4つの選択肢があるはずである。

- (3) a. “Article.” (句読点が内部: アメリカ英語)
- b. ‘Article’. (句読点が外部:
イギリス英語など)
- c. 「論文」(句読点を省略:
日本語の多くのスタイル)
- d. 論文. (引用符を省略)

MS Word に付属するスタイルのばあい、引用符を使う Chicago スタイルなどでは、a のように実装されている。引用符を使わない APA スタイルなどでは当然、d のようになっている。なお、CSL では punctuation-in-quote というロケール・オプションでこれに対応しているが、これが二値なので句読点を省略することには対応していない[12]。

ここでは、書記言語の多様性を考慮をしたスイッチが用意されていないので、そのまま多様性を考慮しない実装になってしまっている。

4.3 語順の固定

語順が言語ごとに異なるものでも、語順が固定されているものもある。例えば、出典注に加えることができるページの記号は数の前にもみ置くように実装されている。そのため、単数のばあいの b:Strings/b:PageShort、複数の

ばあいの b:Strings/b:PagesCountinousShort[sic] には、日本語だと両方とも〈ページ:〉が入れている。そのため〈ページ: 3〉のように出力される。

出版地については、/*b:Source の下に都市の b:City、州や県の b:StateProvince、国や地域の b:CountryRegion がある。必須あつかいされているのは b:City のみであるが、他のものにも値があるばあい、コンマで区切って、昇順で出力するように実装されている。そのため〈府中、東京都〉〈府中、広島県〉のように出力される。

4.4 人名の処理

人名の処理には界面にまず問題がある。「資料文献の管理」や「資料文献の編集」での入力するときに日本語では面倒になる。人名を入力するばあい、フィールドに直接入れるか、「編集」ボタンを押すと現れるサブウィンドウで「姓」「名」「ミドルネーム」に分けて入れるか、どちらかになる。直接入れるときには、MS Word が部分部分に分解している。ところが、個人名の分解は言語の設定によらないので、例えば、姓名の間に空白がない〈亜蘭純子〉であれば全体が姓として、全角空白(U+3000, IDEOGRAPHIC SPACE)を入れた〈亜蘭純子〉でも全体が姓として、半角空白(U+0020, SPACE)を入れた〈亜蘭純子〉では〈亜蘭〉が名、〈純子〉が姓として分解される。正しく分解してもらうにはコンマも加える。〈亜蘭純子〉のようにすると〈亜蘭〉が姓、〈純子〉が名として分解される。なお、複数の人名を入力するには、個人名間を〈;〉(U+003A, COLON)で分ける。

人名を処理する仕様にも問題があり、それは欧文のばあいにも表面化する。各文献の責任者は/*b:Source/b:Author の下に役割によって著者 b:Author、編者 b:Editor、訳者 b:Translator などに置かれている。団体であれば b:Corporate に入れられている⁷⁾。人名が入るのは各役割の下にある b:NameList である。この中に b:First、b:Middle、b>Last をそれぞれ1個以下を含む b:Person がある。

この仕様の1つ目の問題点は、ミドルネームが1つ以下であることが想定されていることである。2つ以上ミドルネームがあるばあいも `b:Middle` に全て入れられてしまうが、各スタイルのイニシャルの実装では、最初のものしか処理しない。

2つ目の問題点は、姓の前後につく小辞やタイトルに対応していないことである。前につく小辞で分離するもの、例えば (Ferdinand de Saussure) の (de) をうまく処理できない。(de Saussure) を姓にすると、出典注で (Saussure, 1876) のようなものを出せない。(Saussure) を姓にすると、参考文献表で (Saussure, F. de) のような形にできない。後につくタイトル、例えば (Martin Luther King, Jr) の (Jr) もうまく処理できない。(King, Jr) を姓にすると、出典注で (King, 1959) のようなものを出せない。また、直接入力をするときも問題になる。(Martin Luther King, Jr) と入力すると

(Martin Luther King) が姓、(Jr) が名として分解される。(King, Jr, Martin Luther) と入力すると (King) が姓、(Jr,) が名、Martin Luther) がミドルネームとして分解される。

5 文献スタイルの違い

ここまでは、MS Word の文献管理機能の多言語化と地域化の問題点を述べてきた。しかし、英語の主要文献スタイルとそれに対応しているはずの日本語の文献スタイルに違いがありすぎて、実装が難しいものもある。

APA の *Publication Manual* の翻訳の扱い[13, p. 204] と日本心理学会の『執筆・投稿の手びき』の扱い[8, pp. 25, 34] では大きく異なる。例えば出典注で、APA では (Piaget, 1970/1988) のように訳者をつけないが、日本心理学会の (Hebb, 1972 白井他訳 1975) のように訳者もつけなければならない⁹⁾。

欧文の文献スタイルでは、参考文献表の各項目が電報スタイルの文のつらなりようになっていて句読点が意味に応じて使われているが、日本語の文献スタイルでは表ようになっていて句読点あまり使われず、空白で区切るものが多い。全てないのであれば、地

域化情報の部分の修正で済む可能性もあるが、日本心理学会の「手びき」のように出版年のあとと全体の最後にのみピリオドが必要なものであれば [8]、対応は面倒になる。

6 多言語化を妨げない再地域化の試み

ここまで述べてきたように MS Word の文献管理機能の多言語化と日本語への地域化には、いろいろな問題がある。とはいえ独立した文献管理ソフトウェアが全体として導入されていない本学の環境では、MS Word の文献管理機能は文献管理の選択肢から外すことができない。そこで多言語化を意識した APA に近い文献スタイルを実装中である。現在、英語については MS Word のものよりは準拠性が高いものを実装した段階であるが、日本語化はまだ途中である⁹⁾。ある程度の形になった段階で公開したい。

6.1 地域化情報の上書き

再地域化では、残念なことに地域化情報をコードの中に含まなければならなくなる。それでもできるだけ情報とコードを分離するために、図1のようなコーディングを考えている。ある変数に、上書きするための地域化情報と既存の地域化情報のコピーを束縛し、ここから情報を得るようにする。こうすると空の要素で上書きすることもできる。

6.2 参考文献表の整列

日本語化で一番問題になるのが参考文献表の整列であろう。これは MS Word 自体に改変が加えられないので、入力に工夫が必要になる。方針として2つ考えられる。1つ目は、何らかのフィールド、例えば通常では表示されない `b:Comments` フィールドに読みを入れ、それを処理するスタイルを作成することである。2つ目は、著者関係のフィールドに特別な印を付けて入れ、整列向けの文字列、表示向けの文字列を区別する処理をすることである。

1つ目の方法をとれば、他の文献スタイルでは整列されないだけであるが、2つ目の方法をとれば、他の文献スタイルでは著者名がうま

く表示されなくなる。しかし、入力の手間を考えると2つ目の方が楽である。このばあい、

名前入力の文字数制限（50 字）が問題になることがどれくらいあるのかを検討中である。

図1 地域化情報の上書き

```

<xsl:variable name="fixLocals">
  <b:Local LCID="1041"><!-- Japanese -->
    <b:General>
      <b:OpenQuote>「</b:OpenQuote>
      <b:CloseQuote>」</b:CloseQuote>
      <b>TitleOpen>『</b>TitleOpen>
      <b>TitleClose>』</b>TitleClose>
      <b:AuthorsSeparator>・</b:AuthorsSeparator>
      ...
    </b:General>
    ...
  </b:Local>
  <xsl:copy-of select="*/b:Locals/*"/>
</xsl:variable>

```

7 おわりに

MS Word の文献管理機能は、多言語化を考慮しているが、仕様と実装にいろいろ問題があり、特に日本語文献の処理に難がありすぎる。とはいえ、ほとんどの学生や同僚が使える

ソフトウェアがこれしかないの現状である。個人的には他のソフトウェアを使ってくれないものかと思うが、そうなる見込みがないので、時間をみつけて多言語文献スタイルの実装をしたい。

注

- 1) さらに先進国の中央図書館のサイト、学術情報の検索サイトなどが主な文献管理ソフトウェアに対応してきているので、書誌情報の保存も楽になっている。ただし、MS Word 組み込みの文献管理機能に対応したものは私の知る範囲にはない。
- 2) 動作確認はそういうものを使っているが、この文書自体は、エディタとして Emacs 24を用い、組版に \LaTeX 、文献管理に \BibTeX を使っている。
- 3) このスタイルが用意されていることと、正しく実装されていることは別であり、言語の選択をアメリカ英語にしても準拠性が低いものもある。
- 4) セキュリティの観点からは理解できるが、スクリプト言語から取得できるはずの文字の属性についても地域化情報の中に入れておかなければ

- いけないので、言語処理がとても面倒なことになっている。
- 5) XSL変換へのスクリプト言語による拡張が無効になっていることとあいまって、地域化情報に大文字で始まる表現と小文字で始まる表現の両方が必要になり、やはり面倒なことになっている。
- 6) この文書の文献管理は日本語化された \LaTeX と \BibTeX をもちい、junsrt スタイルを使っているのので、この節で述べるような約物の使い方をしていない。
- 7) 不思議なことに、MS Word の界面の実装では、団体名がそれぞれに1つずつしか入れられない。それに合わせて、各スタイルの実装も団体が1つという前提になっている。
- 8) 私の確認した範囲の文献管理ソフトウェアでは、翻訳やリプリントのように複数の出版年をもつ

- ものに十分に対応していないものばかりである。 9) ただし、日本心理学会の『手びき』に準拠する仕様では対応していても、文献スタイルの実装では対応していないばあいもある。 のは難しい。

参考文献

- [1] Thomason Reuters. Endnote. <http://endnote.com/>.
- [2] Elsevier. Mendeley: Free reference manager and PDF organizer. <http://www.mendeley.com/>.
- [3] bibtex: Process bibliographies for L^AT_EX, etc. <http://ctan.org/pkg/bibtex>.
- [4] Zotero. <https://www.zotero.org/>.
- [5] Official repository for citation style language (CSL) citation styles. <https://github.com/citation-style-language/styles>.
- [6] Bibword: Microsoft word citation and bibliography styles. <https://bibword.codeplex.com/>.
- [7] ECMA International. Standard ecma376: Open office xml file formats. <http://www.ecma-international.org/publications/standards/Ecma-376.htm>.
- [8] 日本心理学会. 執筆・投稿の手びき〈修正版〉, 2005. <http://www.psych.or.jp/publication/inst/tebiki2005fixed.pdf>.
- [9] 齊藤孝, 西岡達裕. 学術論文の技法. 日本エディタースクール出版部, 新訂版, 2005.
- [10] Charles Lipson. *Cite Right: A Quick Guide to Citation Styles – MLA, APA, Chicago, the Sciences, Professions, and More*. The Chicago University Press. 2006.
- [11] 日本エディタースクール (編). 標準 編集必携. 日本エディタースクール出版部, 第2版, 2002.
- [12] Rintze M. Zelle. Citation style language 1.0.1: Language specification, 2012. <http://citationstyles.org/downloads/specification.html>.
- [13] American Psychological Association. *Publication Manual of the American Psychological Association*. Author, 6th edition, 2010.